

にぎやかに飲み納め

運動部御用達 今池「かめ屋」 学生の味方、55年で幕

「かめ屋、かめ屋」。店内に元気なかけ声が響き、学生らがグラスを空けた。二十六日夜、五十五年の歴史に幕を閉じた名古屋市千種区今池の居酒屋「かめ屋」。名古屋の大学運動部御用達の店は、閉店を惜しむ学生や体育会OBであふれかえった。

一九五〇年の創業。二年前に亡くなった二代目店長の田中昭一さんは「お金のない学生の味方になる店」をモットーに、低料金で酒や料理を提供。中央の廊下には気分が悪くなった学生のためのバケツも常備し、学生たちが暴れても大目に見てきた。常連だった名古屋大体育会第四十二代委員長で会社員の溝川佳孝さん(31)は「店の利益ではなく、いつも学生のことを考えてくれた」。

「学生には思いっきり勉強し、思いっきり飲んでほしい」。昭一さんは鉄鋼会社のエンジニアだった。しかし、店を創業した母親が、自分の運転する車で事故死。昭一さんの長女で店主のひろみさん(48)は「母親への申し訳なさ、そしてエンジニアの志半ばで店を継ぐことになった思いを学生に託したかった」。しかし、不況と学生の体育会離れで客足は激減していった。

昭一さんが亡くなった時、ひろみさんは閉店するつもりだった。が、学生OBらが「やめなさい」と奮起。溝川さんや名大応援団OBの会社員古橋正規さん(33)ら常連がかめ屋のちょうちんをかたどったTシャツ百枚を制作、名大祭などで販売して売上金をかめ屋に寄付。その気持ちが店の存続につながった。

しかしことし二月、料理を担当してきた昭一さんの妻喜代子さんが倒れた。限界だった。

二十六日は応援団や水泳部や柔道部、ボート部などの現役学生やOBら約六百人が集結。用意した五百本のビールは瞬く間になくなった。

午後十時半に閉店。壁に掛かった百種類はある昭一さん自筆のメニューや創業当時の看板、置物は学生が持ち帰った。昭一さんの思いとともに。(社会部・山本真嗣)